
音楽家がまかり通る

天見酒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音楽家がまかり通る

【Nコード】

N7613N

【作者名】

天見酒

【あらすじ】

一人の旅の音楽家がリユートと、出会う仲間達を引き連れて、時にゆったり、時に忙しく旅をしていく物語。

世界に響く音を奏でる。

思い出のプレリュード

モンスターに囲まれ一人で嘆く私。母の言い付けを守らなかった後悔、今にも牙が身体を突き破る恐怖、私の奏でる汚ない音。最終音の断末魔は直ぐそこに。

その時、その音色が世界を支配した。
リュートの静かな音、そして、テノールの声。奏でられる魅惑の旋律。

私の鳴き声もモンスターの唸り声でさえ、全ての音がその音に消される。ただただ、その人の奏でる音が全てに染み込んで行く。

そして、その音の創る一時の世界が終わる時、私は救われていた。

一曲の創る世界。

私の世界は変わった。音の溢れる世界へ！

一曲目 始まりのデュエット (1)

ファイナーレへのラストスパート。ここまでは、当然順調。一つの音も外してはいない。しかし、最後のパートにして最難関。テンポの速くなるのに合わせて、私も必死に全集中を込めた指を動かす。クツ、弦を一つ弾き損ねた。構わない。引き続けよう。これ以上のミスを犯さなければ良いだけだ。

終わった。弾き終えた。さあ、観衆からの拍手喝采の番だ。

まあ、私の前に居るのは、足を止めずに横目で見て去って行く人々だけですけどね。いつもの事ですから、良いんです。私はとても謙虚何です。

いつか、世界一のリユート奏者になって、私の演奏をこんな田舎街の道端で、生で只で聞けると言うチャンスが無視した事を、この私の演奏の素晴らしさを分らない奴等に後悔させてあげます。

今日はおひねりを1チーム銅貨も稼げなかったかあ……。昨日は、頭が後光の如く光る神の如き御心をお持ちの音楽の分かる素敵なおじいさまから、10チーム銀貨を貰ったから、夕飯にはありつけました。

現在の財布の中は、1チーム銀貨二枚と50チーム銅貨一枚1チーム銅貨が数枚。リングが二個買えます。今日の夕食はそれで決めます。私に選択肢はありません。久々の演奏での高収入に調子に乗って、銀七チームの定食なんて食べるんじゃ無かったです。

しょうがないから、久しぶりに職幹旋所に行きましょう。出来れば音楽家に相応しい仕事があれば良いんですけど、飢え死にへとフィ

ナールを迎えようとしているこの際、私はプライドは捨てます。簡単に稼げる仕事ならば、何でも良いのです。前の街みたいに草取り時給銀5タームとか無いでしょうか？

「あれ、もう止めちゃうのか？」

すくすく荷物と纏め始めた私に掛かるテノールの声。振り替えると私の後ろで胡座を組んでいる男。鉄の軽鎧を着て、長剣を携える男。赤毛で赤眼ということは軍事大国シャツの出身、その薄汚れた格好からして傭兵でしょうか。年は私と同じか、少し上か。

とにかく観衆が居たことにびっくりしました。そして、少し嬉しいです。おひねりをくれたらもう一曲弾いてあげるぐらいもつと喜びますよ。

「なあ、あんたさあ、さっきの曲さ、歌詞は付いて無いのか？」

中々鋭い観客ですね。付いてますよ、ワケ有りで歌わないだけです。

「私は歌うのが下手なんです」

「そうか？あんた、良い声してるぜ。顔同様、女みたいで」

「ハハハ、良く言われますよ」

もう行っても宜しいですかね。おひねりも出さずに、私の昔からの心の傷を抉る貴方に付き合っていられないので。くそ、この短い髪型がいけないのですか、それとも旅で着古したこの服装ですか。それともこの乏しい体型ですか。

「あつ、おい。待てよ」

私はさっさとこの場を立ち去りたいのですが。

「何でしょうか？」

普段から心が優しい音色で満たされている私は女神の如きスマイルを彼にあげます。速く用件を言つて、バイバイしましょう。

「一曲奢つて貰つたんだ。昼飯奢るぜ。一緒にどうだ？」

バイバイは後にしましょう！

ああ、私はこんな素敵な方を邪険に扱おうとしていたなんて。

「ご迷惑でなければ、是非、御相伴させて下さい」

フッフ、この人の財布から搾れるだけ搾り取つて見せましょう。

「じゃあ行こうぜ、俺はフレスな。見ての通りの一端の傭兵だ」

私の立ち上がり横に並んで歩き出すフレスさん。その背丈は1・1マアありますね。シャットの人は体格が良いと聞きますけど、成人の平均身長である1マアを逆に0・1下回る私と並ぶと余計大きく見られる事でしょう。

「あんたの名前は？」

おっと、お返答を忘れてました。

「失礼しました。私、レミファと申します」

「何か、名前まで女みたいだな」

アハハハ、駄目ですよ、私。堪えるのです。この方は私の大事な金づるです。

「私は、正真正銘の女ですよ」

「えっ、マジで」

大真面目です。当然の事に絶句しないで下さい。そして、私のコンプレックスである色々と乏しい身体をマジマジと見ないで頂きたい！

フフフ、フレスさん、覚悟して下さいね。今からの昼食では貴方の財布に大穴を開けますからね。

一曲目 始まりのデュエット (1) (後書き)

本編はこんな感じです。

まあ、この小説は天見酒の多作品と異なり、ゆったりとした旅を書いて行こうと思っています。

(2)

奢って貰える相手の頼むものより価格が低いものを選ぶ。これは大人としての暗黙の了解です。しかし、この宿に併設する食堂の給士係り君が持つて来てくれたメニューを見ることを放棄している奢ってくれる人。これは私がどれだけ高い物を頼んでも文句は言わないと言うことですね。

なんて、懷とそこに閉まっている財布が広い人何でしょうか！少し悪い気がするので、後で私の素晴らしい演奏を一曲だけ無料で聞かせてあげましょう。

「まず食事の前に少し話したいことがあるんだけど良いかな？」

食堂の中に充滿する香しい匂い、そして、私の目の前を通る給士さんに運ばれて遠ざかるご馳走達。これらに心を動かされて、私のお腹が不協和音を奏でているのが聞こえませんか。まあ、乙女としては聞こえて欲しくは無いですけど。

「それ、使いこなせるのか？」

フレスさんに指を指された先にあったのは、その他の荷物と共にテーブルに立て掛けられたリユート。貴方、私の演奏をしっかりと聞いてましたか。

「私はこう見えても音楽家、世界一、世界二のリユート奏者ですよ」

そう、先生以外に私の才能に敵う人はいません。

「いや、その横に置いてある長弓の話なんだが」

嫌な事についてくれますね。音楽家の武器、リュートの隣に置かれる長弓と矢筒。一流音楽家に成るために、武者修行をし、各地を点々とするか弱い私は、自分の身を守る為の武器が必要なのです。それだけの理由でお父さんから貰った、この可憐な私に似つかわしくない長弓を持ち歩いているのです。

「百発七、八十です」

正直に言いますよ。そんな物です。弓の弦を引くより、リュートの弦^{げん}を弾かせた方が上手いですよ。

「そこそこな、命中率だな」

少し五月蠅いですよ。どうせ私は村一番の狩人で、百発百中なお父さんには敵いませんよ。父と違って、私は生まれながらの音楽家ですからね。弓の腕なんて関係ありません。

「まあ、良いか。話は後でお待ちなかの食事によろせ」

何なんでしょうね。気になります。フレスさんは何かを隠している気がします。弓の腕を聞いた時点で、私の脳内に走る警告音。私が食べた後で、金欠な私に脅し気味に何かを頼み出すパターンですね。気を付けないといけない。すこぶる空腹な乙女に、大分不利な心理戦を仕掛けて来ますね。

でも、給士さんが来た今はあれですよ。

お腹に軽いサンドイッチと飲み物だけを頼む奢ってくれる人の懐の体裁を保つ為に、少しは高い物を頼まないといけない義務が私にはありますよね。

海鮮パスタに、山菜のサラダに、そして、最高級ブルーア牛のステーキ、飲み物はフルーツミックスで。

これで、フレスさんが、こんな可愛い娘を誘って、湿気た低額で済ませたという男の恥を背負う必要はありません。私はとても男性の体面を立てる女の子なのです。

「レミ、そんなに食いきれるのか」

前に並んだご馳走の数々に気分がクレシエントな私は、フレスさんが勝手に呼び捨てにした事は許してあげます。これがブルーア牛のステーキですかあ。この感動を歌にしたい気分です。

「それ、そんなに美味いか？」

私のブルーア牛のステーキにご満悦な笑顔で話を聞かない私に、諦めを顔に浮かべるフレスさん。凄く美味しいです！でも、これは私のです。絶対にあげませんよ。

「レミに一つ頼みたいことがあるんだけどさ」

ウツ、今まで楽しく味わっていたステーキの味のハーモニーが消えてきました。やっぱり、只では、この銀10タームのハーモニーは味わえませんか？お望みなら、もう一曲弾きますよ？

「俺は傭兵やってんだけどよ。職幹旋所でさあ、実は調子に乗ってドラゴン退治を引き受けちゃってなあ。まあ、一人でやるのはキツいから人が欲しい訳よ」

「それは大変ですね」

他人事です。私は何にも知りません。私の動かすフォークに冷や汗

が伝わって来たのは気のせいです。ドラゴン退治なんか全く役に立たない私は、これを食べたら即、さよならをさせて頂きます。頑張ってください。

「頼む。手を貸してくれねえか？レミの食費や宿代は持つからさ」

こんな美女と食事を同席出来たんです。食事代を持つのは当然です。しかし、宿代を持って下さる？

「私は音楽家ですから、あまり弓の腕があるわけではありません。足を引つ張るかも知れませんが、宜しいですか？」

「おう、別に良いぜ。レミに来て貰えるだけで助かる」

久しぶりの固い地面じゃないふかふかのベッド、冷たい川じゃない温かいお風呂。

ピンチになったら、フレスさんを置いて逃げてしまえば良いのです。いえ、私は私なりの全力は尽くしますよ。音楽家により期待はしないで下さいね。

やった。今日は野宿じゃないよ。この喜びを曲に現そう。題名「美女の裏切り」

良い曲が出来そうです。さて、この芸術的美味しさのステーキを楽しむ事にしましょう。

(2) (後書き)

たまに思います。天見酒は女性を書くことがあるけど、本当に女性の気持ちを書いているか？

こんな事を考えてたらいけないっすね。

女性読者の皆さん、二十代おっさんのためえに女の気持ちが分かるかあゝ！と言ってやって下さい。

男性読者諸君！男性の求めるロマンと言つ名の幻想を突つ走る天見酒を応援してくれ。

俺って、つくづく変態だなあ。

(3)

静かな森を通り抜ける風と鳥達のせせらぎ笑いを、遮断する大声。

「いやあ、ドラゴン退治日和だなあ」

とても物騒な日和ですね。私としては、こんな陽光がポカポカとしている日は、大人しくお昼寝を勧めますよ。そうです。今日はお昼寝をするべきなのです。子守歌なら歌ってあげますよ。

「レミ、元気ねえぞ。昨日のやる気はどうした」

「フレスさんは朝からとても元気ですね」

私は朝に弱いのです。朝の六時に起こされたのは、久しぶりです。

「そんなんじゃないあ、気合いでドラゴンに負けるぞ」

「気合いがあっても、実力で負けますよ」

鋼を弾き、魔法も通し難い鱗、鋼鉄をも裂く爪に、噛み砕く顎、更に鉄をも溶かす炎、まさに史上最強の生物。昨日、食事に誘われて承諾したときには、私は大所帯の中の一人で、実質何もなくて討伐代の分け前にありつけると思っていました。

それが当然ですよ。まさか、か弱い女の子とたった二人でドラゴンを退治に向かうなんて。フレスさんは気狂いだったのですね。そんな気狂いに僅かな餌に騙されてしまう私は、なんて不幸なんでしょうか。

「まあ、俺たちならば大丈夫だ」

またまたあゝ、ご冗談がお得意ですね？こちらは冗談じゃないですよ？

「にしても全然現れねえのな、ドラゴン」

現れなくて宜しいのです。

第一、ドラゴンが出るのは、餌（人）の通る街道沿いで無かったですか？この街道からどんどん逸れて行って会えるのでしょうか？街道を歩いていた方が会えると思いますよ。街道に戻りましょう。そして、このピクニックを止めて街に帰って、お昼にしましょう。もちろん貴方の奢りで。

「結構深くに入って来たもんだな？まあ、分かりやすい足跡は在るのから迷わねえな」

私は気付いてふりを必死でしていましたが、足元を見てないようでした。しっかり見てらっしゃったんですね。それは只の勘で森深くに突き進むほど、残念な人では無いですね。その優秀な観察眼は狩人としてやっていきますよ。ただ、自分の身の丈に合う獲物を追うことも必要ですよ。

足跡から見て、体長4マア、私達の二人の身の丈を合わせても二倍近くはありますよ。もう一度、考え直しましょう。

「おっ、居た！寝てやがる！」

私のハートはドラゴンを見つけてしまったという、プレストにビートを刻みます。そして、ドラゴンが寝ていることにリテヌートに速度を落とすのです。

静かに近付いて寝込みを急所を襲えば良いのです。分厚い鱗もお腹は薄いのです。更に、丈夫なドラゴンの鱗皮は防具の材料として、1タームが銀50タームで取り引きされています。この4マアを越えてるドラゴンさんならば、100タームは得られそうです。

銀5000ターム、イコール金50ターム。人生で一度も金貨に触れた事の無い私には、二人で分けたとしても大金過ぎます。

フレスさん、私を素敵なピクニックに誘って下さりありがとうございます。

「おっしやあ！勝負だ、ドラゴン！」

隣のお馬鹿さんは、取らぬドラゴンの皮算用に夢中な私の思考を裂いて下さるフォルティシモな声を出してくれやがりました。

せっかく熟睡されていらしゃったのに、お馬鹿さんの大声で、鎌首をもたげられるドラゴンさん。お休みの邪魔ですよ。この馬鹿が御迷惑をお掛けしました。あつ、身体を起こさなくて結構ですよ。私共はもう失礼させて頂きますので、御構い無く、どうぞごゆっくりお休み下さい。あら、舌舐めずりして、あつ、朝食がまだだったのですね。何か食べられる物をお持ちしてお訪ねすれば良かったですね。あつ、確かに私の方が柔らかさそうで美味しそうですが、フレスさんの方が量がありますよ。

私の繊細な耳を壊すような咆哮。ドラゴンの口から噴き出された高温の球体。私は軽快な足さばきで、辛うじて交わします。地面に黒焦げな穴。もう少しで、私はウェルダンなステーキでした。現段階でドラゴンに背中を向けたら、背中から美味しいステーキになることでしょう。つまり、私はもう逃げることにすら出来ないのです。お

ぼつかない手で弓に矢をつがえます。

「やっとやる気になったか」

火球を飛ばしたドラゴンに、不敵ににやけるフレスさん。私としては、ドラゴンさんには是非職務怠慢でいて欲しいものです。何故、貴方は余計な事をしたのですか！

こうなったら、私の作戦は一つ、隙を見て逃げる。何故、音楽家たる私がドラゴンと戦う羽目になるのでしょうか？実物を目の前にした今、昨日の楽観的思考の自分を恨みます。餌に釣られて餌になるなんて笑えません。

(3) (後書き)

ご意見、ご感想、大歓迎です。

遠慮なくビシバシときちやって下さい。

(4)

火を吐くドラゴンに全く躊躇する事なく走り込むフレスさん。どうやら、何方か彼に命の大切さを教えて差し上げた方が宜しいようです。

「天地を裂く雷の力。俺の剣に宿ってその力を示せ！」

付加魔法。フレスさんの剣に雷の力が宿り黄色く輝き出します。只の剣でドラゴンの固い皮膚をボコ殴るほど馬鹿では無いことが分かりホッとなりました。

「天地を裂く雷の力よ。私の矢に宿って力を貸して下さい」

真似した訳では無いですよ。ドラゴンには雷魔法が一番聞くそうです。そして、私が知ってる雷魔法の呪文はこの一つだけなのです。私は音楽家ですからね。

懷に飛び込むとするフレスさんにそれを前足で防ごうとするドラゴン。フレスさん、器用に交わしますね。案外、ドラゴンを倒そうとするだけの實力があるのかも知れません。

そんなフレスさんの軽快なステップに業を煮やしたドラゴン。フレスさんを足元から焼き払おうを口を開きます。私はこれ待っていました。スタツカートな音と共に放たれた矢は、見事にドラゴンの口の中へ届きました。さすがは私です。

「やるじゃねえの」

口の中のビリビリとくる調べに激しく踊り出すドラゴン。フレスさんがチラッと私を見ます。

その一拍ほどの出来事でした。

豪快な風切り音。先程よりワテンポ足の動きが遅く感じるフレスさん。その身体を強靱なドラゴンの尾が捉えたのです。

私の真横を通り過ぎ、後方の地面に力無く叩き付けられるフレスさん。

その光景に私の頭の中からは音が消えます。聞こえるのは痛みに耐えながら近付いて来る重厚な絶望の足音。

前衛のフレスさんが居ない。私はここで終わるのです。死ぬのです。

怖いです。泣きたいです。

でも、その時、私には、あの時の音色が聞こえたのです。あの人の奏でる優しい声音。

“貴女がどんなに独りでどんなに怖くても、音は貴女の側に居ます。貴女が楽しもうとすれば、それが音楽になるのです”

私の雷を付加した矢がまだ利いているのか、動きが鈍い観客。聞かせて上げましょう私が師匠から教わった音楽を！

矢筒と共に背中に抱えた私の宝、リュートを手に持つ。奏でるは私がフレスさんと出会った時に弾いていた曲。歌うは、神の怒りに触れた冒険者の伝承の物語。

大海を船で巡ると、五人の男

世界を回り、世界を見た

最後に男達が目指すのは、神が住まう神の島。眼に映った神の島。突如、吹かれる神の風。神の島へは来させんと風の神が呼ぶ嵐。帆は折られ、船は引き裂かれ、海の底。男達は、神の島を見ずに、海の底。

男達は海の底で嘆く。ああ、神の島を見たかった。

奇跡的に、いえ、私ならば当然の事です、一音も外さずに完奏しました。集中するために瞑っていた瞼を開けます。

今、歌った物語に出てくる船。神の風に帆を折られ、船体をズタズタに引き裂かれ船。それを表すように首を折られ、身体をズタズタに切り裂かれて倒れているドラゴン。

私の足からは力が抜けて、膝、お尻と二拍子で地面にへたり込みます。助かった安堵感が全身を巡ります。

と、同時にボロ雑巾のようなドラゴン。このズタズタなドラゴンの皮を換金は出来そうにありません。死にそうな目にあってこれでは割に合いません。また、涙腺が弛みそうです。

「お前、スベルツング呪文歌を使えたのか！」

相変わらずのフォルティシモな声と大きな影が私を背後から覆います。不味いです。この歌を含む幾つかの不思議な力を持つ歌は、師匠と人前では決して歌わないと約束していたのです。フレスさんが気絶しているものと思っていました。見た目通り頑強なのですね。

「何の事でしようか？」

お惚け半分、スペルソングなどと言う単語を聞いた事が無いのが半分です。おそらく、スペルソングとは、師匠から教わった先程のよ
うな曲の事何でしょうけど。

「…まあ、良いか。とにかく疲れたろ、帰ろうぜ。今日も飯を奢つてやるぜ」

フッフ、ここまでやらせたのです。そんなの当然に決まっているじゃないですか。ドラゴンの皮で損した分は、貴方の財布で取り戻させて頂きますよ。ところでです。

「あの、そのですね。私としたことが腰が抜けて立てないので、少し休みま…つてえ〜！」

無断で私の身体を軽々持ちあげるフレスさん。その私の抱えかたはあのお姫様抱っこ、では無くて、樽担ぎです。花も恥じらう乙女を樽担ぎですよ！

「下ろして下さい！自分で歩けますから！」

「遠慮すんなって、街まで運んでやるよ」

こんな姿で一目に付く所まで運ばれる何て、絶対にごめんです！その顔は絶対に私の恥じらいを分かっている、やってますよね？最低です！

（４）（後書き）

この話で、始まりのデュエットは終了。こんな感じのレミリアのお話です。

次話は間奏が入ります。

天見酒は感想、意見お待ちしております。どうぞ宜しくお願いします。

間奏曲 籠絡の夜想曲

隣で気持ち良さそうにスヤスヤと寝る少年。失礼、少女の手には鞘に収まるナイフが握られている。

宿屋が大盛況で、相部屋しか取れなかった結果、俺が夜におかしな行為を働かないように握っているそうだ。生憎、俺はお前を女としては見ていないんで、取り越し苦労だぞ。

そんな杞憂はどこへやら無邪気にぐっすり眠るレミファ。その寝顔を見ながら顔がにやけてしまう。

良い女を見付けたもんだ。いや、良い駒を見付けた。

レミファのベッドの縁に弓と並べて立て掛けてあるリュート。

俺に音楽の良し悪しは分からない。街中で音を出すこいつを見付けた時、俺はこいつの手に持っていた只の楽器より、脇に少量の荷物と共に置かれていた弓矢だけに惹かれた。

銃や弓は剣より断然強い。銃は、この国、ハーシルでは、治安維持のため、兵士以外は持てない。今は只の傭兵な俺がハーシルの兵士に声を掛けても無駄になるのは分かっている。だから、銃の使い手は諦めていた。

弓は誰でも持てる故に、せめて、弓の使い手が欲しかった。だから、レミファに声を掛けた。こいつの腕を試して見るつもりで。

しかし、予想外だった。弓の腕は良くも無く、悪くも無く。俺がドラゴンの尾に意識を失った演技をしたら、あっさり、弓を捨てやがった。

その時は別にこいつが死んでも良くなった。ドラゴン一匹に殺される奴を俺はいらない。

だが、レミアは俺の予想を遙かに越えていた。リユートを手に取り、歌った歌。ドラゴンの皮膚を引き裂く神の風。呪文歌。昔、祖母から聞いた消え去りし古代魔法。呪文の歌い手と共に歴史から消えていく魔法。それまで、祖母の作った子供用のお話の中だけの代物が、俺の目の前で歌われた。

今では、レミアの弓等、俺の眼中に無い。俺の欲しい物は、レミアの声と指とリユート。

本当に良い駒を手に入れたものだ。こいつは優しい顔をして、飯を食わせてやれば、ほいほいついて来る。これから、こいつに働いて貰う事を考えれば安い物だ。

レミアが身動く。おっと、笑い声が漏れちまったかな？

まあ、その時が来るまでのしばらくは優しく面倒を見てやるから、楽しい夢を見てろよ。

その後は、俺がシャットの覇権を奪い取るために、存分に働いて貰うからな。

俺の手駒としてな。

間奏曲 籠絡の夜想曲（後書き）

。まだまだ、この小説には、愉快的合奏者達が出てくるのですが、取り敢えず、このどちらもとちらな腹黒コンビから、旅は始まりま
す。

どうぞ、続きをお待ち下さい。今週中には更新します。

二曲目 背信者に捧ぐゴスペルソング (1)

神の見守る都市ラスルル。最高神ラスターの教えを信奉するラスタ
ー教団の統治する宗教都市。

そのメインストリートは左右対象に整えられ、日の光反射する白き
建物が整然と並び、中央にはラスター神の像と噴水。まさに、現世
に再現した神の国です。

「白くくして眼がチカチカする街だな」

私の隣で芸術を解する感性をお持ちでない哀れな男が興の冷める事
を言います。

あのドラゴン退治の次の日、フレスさんがどうしても私の音楽修行
の旅に同行したいと仰るので、少々 of 考慮の末、私のお供を許可し
たのですが、その芸術感性の無さは私のお供失格ですよ。

この街は数々の高名な芸術家を産み出しています。画家、彫刻家、
そして…。

「この街は、あの有名な神聖音楽家であるシラク司教がいらっしや
るですよ！是非、会わなければいけません」

彼の弾くパイプオルガンの音色は重厚で荘厳。それでいて、庶民に
親しみ易く、万人の心に神が宿るような優しき音色であるのです。
まだ村でラジオにかじりついていた頃から、ノイズの混じらない彼
の演奏を、実際に耳で聴くことを願って止みませんでした。

「彼は朝の八時と昼の三時、夜の六時に、ラスター正教会大聖堂で

無料で演奏するんです。フレスさん、早速行きましょう!」

「分かったからレミ、興奮するなよ。まだ、十二時だぞ。三時間も待つのか?」

私の頭をはしゃぐ子供を押さえるようにして止めるフレスさん。私は別に興奮していません。シラク神父の演奏の為なら三時間ぐらい我慢できる程、大人なのです。

その時です。慎み深き乙女には釣り合わない、慎み深くないお腹が重低音のメロディを奏でます。フレスさんがその音を継いで、小さな笑い声を出します。

「俺は昼時で腹ペコなんだ。ご相伴願えますかね、お嬢さん?」

顔が火照っている私は、そのフレスさんのお誘いとお腹の嘆きに応えて、小さく頷きます。

聖装である白いローブを纏うラスター教信者さん達の波に、身体の小さな私が飲み込まれないように底いながら進むフレスさん。

フレスさんは音楽を全く分かっていません。でも、その巨体に似合わない乙女な私の扱いは心得ています。今回だって、私の羞恥心を軽減するように取り計らってくれたし、私の財布から、この昼食代を払わせるなんて事はしないでしよう。

音楽家の同行人としては相応しいとは言えませんが、旅の同行人としてはとても良い人なんです。たまにですけど貴方は、神が努力する悲劇の音楽家の私に遣わした天使なのではないかと思ってしまうます。

フレスさんと居れば、食事や宿泊費等のお金の心配をする事も少な

くなりました。見知らぬ街で見知らぬ人だけに囲まれる不安が無くなりました。街から街へ移る時の夜にモンスターに襲われるのじゃないかと寝れない恐怖もこの五日間はありませんでした。

何より、生家をリユートと弓を抱えて黙って飛び出して二年、頼る人の居ないその日暮しな生活。正直、私はとても寂しかったんだと思います。

だから、私、フレスさんに少しは感謝してるんですよ。

ですから、お昼、多めに食べても良いですよ？天使の如き優しさを持ち合わせる貴方は喜んで、私のお腹を満たしてくれるのです。フレスさんには感謝してもしきれません。

二曲目 背信者に捧ぐゴスペルソング (1) (後書き)

俺の書く小説って、何か趣味に生きる主人公が多くないかと思う今日この頃。

まあ、天見酒が趣味人だからね。

(2)

お腹を八分目に満たして、私達はいざラスター教大聖堂へ。既に大聖堂には数多くの人達が集まっていました。

「俺達、注目の的だな」

ステンドグラスからの光を浴びるラスター神像、教卓とパイプオルガンを囲むように並ぶ長椅子の最高列に身を預けながらフレスさんがポツリと言います。

「途中で白い服を勝手くれば良かったですね」

辺りには純白が溢れている。信徒、巡礼者、教団関係者は一様に白を基調にした服装。その白い集団の中で、フレスさんがその大きな図体に色褪せた銀色の鎧なんて身に付けて居るから目立つんです。その横に座る色褪せた藍色の服に、赤茶色のマントを羽織る可憐な美少女は、今、周囲の人々にどのように見られているのでしょうか？壁際に並んで立つこれまた純白の鎧を着てるラスター教団の護衛騎士さん達が、何やら先程から私達のばかり見ています。私達は怪しい者じゃありませんよ。少しは怪しく見えても、何も出来ない薄弱な美少女です。

他の町にあるラスター子教会では、白い服よりも、その他の多種多様な色の服が目立つほどでした。でも、ラスター教本拠地であるここでの私服訪問は避けた方が良かったようです。周囲の視線が痛いんです。隣で憎たらしいほど落ち着きを払っているフレスさんの様に図太い神経が欲しいものです。しかし、ここまで来てシラク司教の演奏をお預けは絶対に嫌です。私はその為にどん

な神の試練も耐えてみせます。

「おつ、レミのお待ちかねの人物が来たようだぞ」

ラルゴな欠伸を隠さずに大袈裟にリピートしていたフレスさんが私に告げます。今まで、私達に向いていた多くの視線が二人の守護騎士に付き添われラスター神像の前に立った男性に向けられ、大聖堂内に静寂が訪れます。純白の修道服に身を包み、ロマンスグレーの髪と丸眼鏡、顔には柔和な笑みを浮かべている男性。写真でならば、顔を拝見したことがありますから、間違いありません。神に指を授かりし、ペザン・シラク。

「女性の守護騎士も居るんだな？結構な別嬪さんじゃなか。教団の重要人物の警護しているって事はそれなりの腕があるのか？」

貴方は一体何を見てらっしゃるのですか？確かにシラク司教の隣には、羨ましいほどスレンダーな体型の女性がその整った顔を仏頂面に歪めて、槍を携えて、伴っています。でも、今はシラク司教の方が重要です。シラク司教の演奏を毎日聞けるだけじゃなく、私と違って肉体の成長に恵まれた女性騎士なんて全く興味無いのです。

シラク司教は辺りをゆっくり見回した後に、その女性に何か耳打ちをします。今、シラク司教の視線が私に止まったように感じたのは、気のせいでしょうか？もしかしたら、シラク司教は自分を越える、未来の大音楽家の存在を感じ取ったのかも知れません。さすがはシラク司教です。

そんな私の心の高鳴りは、シラク司教が壇上に立つとピークに達していきます。

「お集まりの神の子、そして、我が兄弟達。まずは、この出会いを神に感謝しようではありませんか」

バリトンの声が聖堂に響き、シラク司教は腕を胸の前にバツテンに組みお辞儀をします。その拝礼を真似る人々。隣で欠伸を堪えている人と違って、私も拝礼をします。フレスさん、郷に入ったら郷に従えですよ。

「フレスさん、そんなに眠いなら、先に宿を取って休んでいて貰っても良かったんですよ？」声を絞り、フレスさんに言います。フレスさんは私を見ずに声を出します。

「いや、宗教に興味が出たかな。レミの影響かな、最近、音楽にちよいと興味が出てきた」

それは私としては大変喜ばしいことです。ならば、私の隣で欠伸は止めて下さいね。せつかくの厳粛な演奏が台無しになりますから。私はシラク司教の奏でに全神経を傾けたいのです。

「それでは、神から授かったこの指を、神に福音曲を贈ることに捧げましょう」

フレスさんの小さきやり取りの間に神への祈りを終えて、自身の背を五倍は凌駕しているパイプオルガンの前へ腰を下ろすシラク司教。

この聖堂に集まった皆一同に、神から授かりし指が鍵盤に舞い降りるのを待ちます。

大聖堂にある全てを震わせんばかりの長大な一音。私の身体も共鳴するかのように震え、鳥肌が立ちます。

ラスター聖戦曲。闇を照らす月の女神ルーファス、彼女を疎ましく思った闇の神プレアスが彼女を地底奥深くの牢獄へ閉じ込め、それを太陽と天空を守るラスター神が助け出す。このラスター神話の一節を基に作曲したシラク司教の代表曲。

ルーファスが夜空を照らす場面は静かに柔らかく、プレアスの登場で段々と重々しく激しく、ラスターがプレアスと戦いは力強く荒々しい。そして、ラスターの取り戻した月が静かな夜を再び優しい音色で照らしながら、フィニッシュを迎える。

まさに、音による神話の再現。重低音なパイプオルガンが千変万化な音色を奏でました。まだ、私の心身は余韻で震えています。

「レミ、泣いてんのか」

何処からか取り出した薄汚れたハンカチを差し出しながら、フレスさんが苦笑しています。貴方はこの演奏に感動出来ない可愛いそうなんですね。私はシラク司教のこの演奏を聞く為に産まれてきたと思ってしまうくらいですよ。私もいつかこんな大舞台で、人々を感動させる音楽をしたいものです。勿論、シラク司教のように無料とはいきませんけどね。

シラク司教の腕ならば、一曲金1タームは稼げるのに、それを無料で聞かせ続けている。なんて、尊いお方何でしょう！

「レミ、そろそろ行こうぜ？別にお祈りは良いだろ？」

シラク司教がパイプオルガンから離れ、信者達の中を歩いてお祈りを始めたのをきっかけにフレスさんが私に静かに語り掛けます。徐

々に退席していく巡礼者達も居ますし、私達はラスター教の信徒と言う程の人間では無いので、失礼させてもらった方が良いでしょう。

「申し訳ありませんが、少々お待ち頂けませんか？」

聖堂を出ようと立ち上がった私達に突如後ろからアルトソプラノな声が掛けられます。

私達と椅子を挟んだ後ろに先程シラク司教と共に現れた女性守護騎士がしかめっ面で立っていました。

「何でだ、姉ちゃん？」

私はこの女性から感じる威圧感たつぷりの態度に冷や汗が滲んで来ているのですが、フレスさんは怯む様子も無く、軽い口を聞きます。まさか、服装が白で無いから、冒涇罪とかでは無いですね？絶対に牢屋には入りたくありません。

「シラク司教様が、あなたと話したいとのことですので、他の方々のお相手が終わるまで、しばらくお待ち頂けないだろうか？」

シラク司教が私と話したい？

「是非、待たせて頂きます！」

これでもしも、私に秘められた音才に気付かれたシラク司教に私を弟子にしたいと申し込まれたらどうでしょう。私は偉大な音楽家である先生やシラク司教のような見る目がある人が見れば、輝かしい偉大な音楽家の原石なのです。全く我ながら己の秘めた才能には困ってしまいます。

「ハア」。面倒だけど付き合ってやるか」

私の華麗な即答に、溜め息を吐きながら再び長椅子にもたれ掛かるフレスさん。それでよろしいのです。

シラク司教のご指名です。フレスさんに引つ張られても私は絶対にここを動きませんよ。シラク司教、そんなおばさん信徒なんか構ってないで、早く私の所に来てください！

（2）（後書き）

投稿がかなり久々に感じます。今日はもう一話投稿しちゃいます。
皆様のご感想をお待ちしておりますよ。

(3)

三十分ほど待ったでしょうか。その間に聖堂に集まった方々は散会して、減つていき、聖堂にはラスター像を始めとした美術品を拝んでいる信徒や聖職者に神託を授かる方々が残るのみ。

シラク司教の信者達の相手が一段落ついたのか、私の方へと歩いて来ます。あのシラク司教が今、私の目の前に！

「大変お待たせして申し訳ありません。ご存知かと思われませんが、私はラスター神に仕えさせて頂いているペザン・シラクです」

慌てて立ち上がる私。スタッカートが私の心臓をぶち破ろうとじています。あるうことが、声が出せません。

「俺はフレスだ。それで、用件は何だ？」

私の代わりに不粹な声を出すフレスさん。貴方はシラク司教になんて口を聞くんですか！私達の後ろから、シラク司教の横に回った女性守護騎士にも睨まれてますよ。それに、シラク司教が用のあるのは貴方では無く私なのです。

「失礼ながらフレスさんはシャットのご出身でいらっしゃいますか？」

「そうだが？もしかして、万人に平等に太陽の恵みを、の決まり文句を掲げてるラスター教会は、野蛮なシャット民族はお断りですってか？」

「いえいえ、そんな事は決してございません。ラスター神は全ての生き物を受け入れます。前から、貴方の赤き髪と眼を拝見して、逆に喜びを感じた程です。フレスさん、我々はシャット民族である貴方を歓迎しますよ」

シラク司教のお眼鏡にかなったのは、私では無く、フレスさんでした。どうせフレスさんと違って、私の身長では前から見つけ辛いですよ。フレスさんの様に髪も瞳も赤くないですしね。少し泣きたくなってきました。

「悪いが、単刀直入に言ってくれないか。俺は気が長い方じゃないんでね」

フレスさんが、シラク司教にぶつきらばうに言います。私がシラク司教と話したいです。でも、どう話を持ち掛ければ良いのでしょうか？まずは、シラク司教の今日の演奏についてご感想を…。

「それは、失礼しました。では、率直に言わせて頂きます。フレスさん、貴方にお頼みしたいことがあるのです」

またしても私は声を出せず、シラク司教はフレスさんへ。しかし、聖職者がシャットの傭兵に頼みたい事とは何でしょうか？

「貴方の方が良くご存知かと思いますが、シャット国内は現在、三つの勢力に別れた内乱が続いております。同じ大地に住む人間同士が争うなど大変嘆かわしい事です。我々、ラスター神に支える者としては是非、シャットの民にも神の御心を知って貰い争い無き世界を創りたいと常々思っております」

「詰まる所、俺にシャットでのラスター教布教の水先案内をして欲

しいって事か」

フレスさんの先読みに頷くシラク司教。シラク司教は音楽家である以前に敬虔なラスター教徒であるのですね。

「内乱状態のシャツトに宣教師を送るには、シャツトを知る人物が居ると大変心強いのです。勿論、教団の方からそれなりのお礼は…」

「悪いがお断りだ」

フレスさんが即答します。私としては、シラク司教たつての願いで謝礼付き、でも現シャツト国内の混乱と危険は知っている、悩ましい所です。

「俺は神様に興味は無いし、シャツトじゃ、まずラスター教の平等主義は流行らねえ。何より、こいつがシャツトに行くにはまだ時期じゃないしな」

フレスさんが私の頭に軽く手を置きます。確かに、内乱の続く現シャツト国内は治安が悪過ぎるのはハーシル王国でも周知の事実です。フレスさんのような戦士はともかく、私のような可憐な少女はせめて内乱が治まってから行くべき地でしょう。

そう言えば、フレスさんは何故ハーシルに来たのでしょうか。傭兵ならばシャツトの方が仕事があり余ってるでしょうに？

「貴方はラスター神を信じていないと言うのか？」

「ああ、全く興味ないね」

私がフレスさんの顔を見ようとした時に、槍を片手から両手に持ち直した女性守護騎士が言います。私の頭の上にあったフレスさんの右手が剣の柄へ伸びます。貴方は何で、守護騎士を挑発してるんですか！ここで喧嘩をする気ですか！

「止めなさい、ルー！例え、彼らに信心が無くとも、どんな人も神に守られる権利があるのです！」

シラク司教の言葉は、聖堂内の視線を集めた後に、女性が槍を下げてシラク司教に一礼して、一步下がります。

「失礼しました。彼女はとてもラスター神への信仰心が強いのです。それ故、職務には真面目でして……」

「俺は斬りかかれても別に構わなかったぜ？」

フレスさんが未だに意志の強い眼を向けているルーさんという女性に、挑発的に笑いかけています。お願いですから、大宗教に喧嘩を売らないで下さい。

「フレスさんは宗教に興味が無いと申されましたが、それならば何故にこの教会へいらっしゃったのですか？」

「ああ、別にラスター教に興味は無いんだけど、こいつがどうしてもあんたの演奏を聞きたいって言ったんですね」

この場を取り繕うようにシラク司教にまたフレスさんが私の頭に手を置きます。ここに来て初めて良いことを口に出します。やっと、シラク司教の眼が私に向けられます。

「レミファ・アニアと言います！音楽家です！素晴らしい曲でした！」

シラク司教へ送る頭の中で必死にイメージしていた詞も旋律もどこかへ流れて行ってしまいました。あのシラク司教と話している私は軽いパニック状態です。私は次に何を言おうとしていたのでしょうか？

「そうですか、貴方は音楽をおやりになるのですね？それは素晴らしい。音楽も神の御心と同じく万人に与えられる心の平穏ですからね。その背負ってらっしゃるリユートをお弾きになるのですか？」
まるで、全ての人に愛を配るかのようなシラク司教の優しい眼差しと御言葉。

「ハイ！」

何を思ったか、慌てて背中からリユートを手に取る私。出来れば尊敬するシラク司教に、私の演奏を聞いて頂きたい。私の身体がそう訴え掛けていたのでしょう。

「その紋章は！」

私がリユートを抱えて弾き出そうとすると、シラク司教の眼に驚嘆が映ります。

「レミファさん、そのリユートを何処で手に入れたのですか？」

今までフレスさんの数々の無礼な態度にも落ち着きを払っていたシラク司教が、眼を鋭く細めて詰問するような早口の質問。シラク司教の豹変に私は少し肩が震えてしまいます。

「失礼、私としたこと少々取り乱してしまいました。それで、そのリユートはどちらで手に入れたのですか？」

柔和な表情と口調に戻り問い直すシラク司教。私もこの方を怖いと思うなんてどうかしていたようです。

「待て、レミ！シラクさん、このリユートについて何か知っているのか？」

私が口を開き掛けた途端にフレスさんに止められてしまいました。このリユートは、先生が私の前から去る前に譲ってくれた物で、そこまで高価な物なのですか？かなり古い物であるの是一目瞭然ですけど。

「いえ、確かな事は分かりかねますが…、ある人物の持ち物ではと」

私の眼はおかしくなったのかもしれませんが。シラク司教が私を止めたフレスさんを一瞬怒りを帯びた形相で睨み付けたように見えました。どうやら、私の命とお財布と同等に大事なこのリユートはまた背中に戻した方が良いでしょう。

私は慌ててリユートの肩紐を肩に掛けようとします。

その時です。今まで、黙ってフレスさんに睨みを利かせていたルーさんの鎗が動いたのは、そして、私の背中が強く押されて床に倒れる痛みと私の手からリユートが離れる感覚が起きたのは。

(3) (後書き)

レミファの先生。リユート。スペルシンガー。どんどん伏線を張っていきますが、ちゃんと回収できるのだろうか？いや、しますよ？

(4)

急に大理石の床にぶつかった私の身体。そして、私の頭を流れる鋭い二陣の疾風。

「早え！」

「躬された！」

フレスさんとルーさんの声が合唱。大理石に打ち付けられた痛みにこらえて私が立ち上がり見たのは、大聖堂の正面門を潜ろうとする白い後ろ姿。

「レミ、悪い！リユート持ってかれちゃった」

私への死刑宣告の後、白いロープの後を追うフレスさんの背中。冗談ではありません。あのリユートは私と先生の大切な絆なのです。失う訳には行きません。私もフレスさんの背中を追って駆け出します。

「ルー、私は他の騎士を集めてから追います！彼らを見失わないように、あのリユートを取り戻しなさい」

その私の背中を追うシラク司教の声。

「御意に！この神の家で引つたくり行為など許せません」

どうやら、異教徒の私の為にシラク司教がわざわざ守護騎士を何人か動かしてくれるようです。ラスター神に感謝します。

「レミ、お前はあそこで、いや、先に宿を取って待ってる！俺がリユートを取り戻してやるから」

御免です。あのリユートが手元に無いと心の平穏が無いのです。

それに私、足には自信があります。物心ついてから先生と音楽に出会うまで、獲物を追って森を駆け巡っていた足は、先に出た貴方に直ぐに追い付くほどですよ。舐めないで下さいよ、計らずも村一番の狩人の血を引く私は、演奏に継いで、狩りの腕も一流なのです。まずは前を走る獲物の足を射ぬいて見せましょうか？

…無理ですね。獲物は足が速すぎます。既にフレスさんを抜いた私の足でも追い付けません。見失わないでついて行くのがやっとです。そして、白いフードで顔を隠した獲物が大人の波を器用にすり抜ける姿を見て分かるのです。背丈が私と同じくらい小さいのです。向こうの方が少し大きいかもしれませんが。女神のごとき寛大な心を持つ人間として、子供に矢を射るのは気が引けます。

だからと言って、私のリユートを奪う行為は絶対に許される行為では無いのです。

私から物を取るなんて、足の一本ぐらい奪われてもしょうがないですよね？

そんな私の思考を読み取ったのか、建物の狭い隙間に入り込む獲物。獲物に誘われ段々と中央通りから遠ざかって行くのが分かります。歩く人の数と比例して、白を基調にした整った建物が減り、修繕を必要と訴えているひび割れの目立つ建物が優雅な神の街ラスルルの裏側に有りました。

「これがラスター神の万人への平等なお恵みね…」

私の後ろから、フレスさんの皮肉が聞こえます。いくらラスター教だつて、全ての人を救えないって事です。

「それでも、シラク司教は全ての人を救おうと努力しています。それは素晴らしい事だと思いませんか？」

少々、息切れ混じりで私はフレスさんに言います。私は、誰かを救う為に努力している人間では有りません。でも、シラク司教は私の為に権限を使つてリユートを取り戻そうとしてくれようとしているのですよ。

「その通りだ！貴方もその幼きながら良識を心得ている男の子を見習つたらどうだ？」

獲物の横から突然槍をつき出す女性。獲物の足止める。釣られて私達の追い掛けつことも終演を迎える。ルーさんはフレスさんに大分悪印象を抱いているようです。ところで、幼きながら良識を心得ている男子とは誰の事でしょうか？ここには、フレスさんとルーさんの他に、私から宝物を盗ろうとした良識無き泥棒と、良識ある大人な美少女しか居ませんよ？

「シラク司教様や教皇様はこの神の都にこういったスラム化した地帯が有ることを憂いていらつしやる。神のお膝元でこのような事をやる輩が出てしまう事にもな」

ルーさんの槍で足元を狙う横薙ぎ。白ローブの子はそれに上手く合わせて後ろへ下がりはりと交わします。私がルーさんの槍で同じ芸当をやれと言われても出来やしません。それだけ、ルーさんの槍が速く、この子が動きが速いのです。

「ここに住んでる連中は、心を痛めて貰うよりも、金を貰った方が喜ぶぜ、っと！」

フレスさんがルーさんに反論しながら、上臈ぎに剣を大振りします。

「シラク司教様もただ思い悩むだけでは無い！ここに出向き、パンを配り、神を信じる者には教団の仕事を与えている！野蛮な神を信仰し、戦いばかりしているシャット人と違って。貴方と同じにしないで頂きたい！」

今度は槍を水平に突き出すルーさん。

「どうだかねえ？それがこいつらを救っているのかは、怪しいもんだぜ。チツ、ちょこまかと逃げ回りやがって。それにしても、姉ちゃんなかなかの使い手だな？」

「そういう事は、彼らの為に貴方が何かをやってから言いなさい。ここまで華麗に避けられると自分の腕を信用出来なくなりますね。貴方の剣筋も熟練の域ですよ」

二人の連撃を繰り抜けて、二人と私の間に立つ子供。言い争いながらも息の合った二人の刃の舞いに合わせて見事に舞い切る子供に、私は何も出来ず、矢をつがえた弓を手にぶら下げて見ていただけでした。何だか私だけ仲間外れです。

リユートが手元になれば、今の演舞にテンポの速い舞曲でも伴奏してあげたいところです。

二人の攻撃の手が休み、不敵に立ち尽くす白いローブ。肩が震えています。それは恐怖から、では無いようです。

「僕としてはお兄さんの意見の方に大賛成。ラスター教団のお偉いさんは、神を信じる従順な人を不平等に救ってるだけだからね。そうでしょ、守護騎士のお姉さん？」

子供特有の高い声でそう笑いかける白いローブ。声変わり前の少年でしょうか？

「盗みを犯しておいて、さらに神を侮辱するとは。子供だから手を抜きすぎていた様ですね？」

僕、あまりルーお姉さんをからかつてはいけませんよ？貴方は私のリユートを持っていて、ルーさんは槍を持っているんですから。生意気な子供とともに私の宝が串刺しなんて事は避けたいのです。

「おい、坊主。その楽器をレミに返しな。そしたら見逃してやるぜ」

フレスさんがそう言うのなら、村で子供に対する優しい扱いが上手い事で有名だった私は、お尻を引っ張ったく騷は止めて置きましょう。

「えー？僕は親切でこのリユートをここまで持ってきてあげただけだよ？そっちの小さなお兄さんが、あのシラクから騙し盗られないようにね。あのシラクが目丸めるほどだから、良い値で売れそうだしね？」

得意気にからかい口調で語る青年。とにかく私のリユートを買ってに売られては困るのです。

「僕？小なお兄さんって誰の事でしようか？とにかく早く、そのリユートをお姉さんに返しなさい。付け加えるならば、シラク司教は私から物を騙し捕るような方ではありませんよ」

「えっ！お姉さん？」

「女性、だったのですか！」

私は衝撃的事実を発表してませんよ。当然誰もが一見で知る事実を口に出したただけなのです。この生意気な少年にはやはりキツイお仕置きが必要なのも当然の事実で、大人としての役割ですよね。

「レミの性別はどうだって良いんだがよ。坊主の持つてるそいつは、レミが持つててこそ価値があるんだ。痛い目みたくなければ返しな」

フレスさんは間違った事と正しい事を少年に言います。私の性別はどうでも良い事ではありません。そして、そのリユートの価値を最大に引き出せるのは間違えなく私だけです。元の持ち主の先生を除外すればですけど。

「ええ、どうしよっかなあ？」

フレスさんの言葉は心に響かず、代わりに私のリユートの第三弦を弾いておどける少年。

「良い度胸だ。坊主、俺は丸腰相手に本気は出せねえ。そのひらひらの布に隠した腰の物を抜きな。俺に勝てたら、それをくれてやる」

「ちょっと、待ってください！」

そんな楽しげに私の私物を景品にしないで下さいよ！

「却下だ！レミは手を出すな！姉ちゃんもな。一対一、悪い条件じやあねえだろ、なあ？」

「待て！ラスルルでの私闘は禁じられて」

「お堅い事言うなよ、姉ちゃん。俺は異教徒で野蛮なシャット人だぜ？邪魔すんじゃないぞ」

この人には戦闘狂と貶し称えられるシャット人の血が色濃く流れているようです。でも私のリユートが危ない時に、そんな決闘精神を出さなくても良いじゃないですか！

「僕は喧嘩は得意じゃないんだけどね。でも、只で逃がしはしないってことだよ」

私のリユートの肩紐を自分の肩に掛ける少年。視界を良くするためか、頭に被ったベールを脱ぐ。金色に輝くショートヘアーに北方の血を引くことを示す深い青の瞳に純白の肌。北方の神話に出てくる愛らしい天使のような顔立ち。不釣り合いにローブの中から取り出した柄を握る拳から膝までも刃渡りがあるダガーナイフとにやける口元がなければですが。

「シラクが来る前に早く片付ける事にするよ。お兄さん、男に二言は無いよね？」

その天使のように微笑む顔は、その足が動き出す前に小悪魔の顔へと変わる。

(5)

幾重に続く鉄と鉄の奏でるハーモニー。

フレスさんの剣は遅い方ではありませんし、その技は鈍い訳では無いのです。ルーさんの言った通り熟練の域に達してるのでしよう。今は相手と対比して遅く見えるだけです。目に見える体格差を物とせず、ダガーでの鋭い連撃を繰り返す少年。それを防ぐ事に必死のフレスさん。

「坊主、やるもんだな。剣はどこで習った？」

「そんなこと忘れちゃった」

一見圧されているようにフレスさんからは余裕が見られます。逆に、フレスさんに斬りかかるまでは、余裕たっぷりな表情だった少年の口調に焦りが見えます。

何度目かの攻防の後に大きく舌打ちをして、フレスさんから離れる少年。もう降参ですか、いえ、してください。私は何時少年の背中にあるリユートに刃が当たってしまったのか、ハラハラドキドキなのです。

「世界に種子を運びたまう風の神ウィルマ。その力を一陣の刃に変えて僕の敵を切り払え！」

不意に声を上げた少年。フレスさんはそのスペルに反応して横に動き、見えない刃がフレスさんの居た地面を削ります。次の瞬間には、少年はフレスさんの懐へ。一際大きい鉄の振動音。

「目眩ましの魔法に次いで、良い攻撃だけだよ。今一步、踏み込みが足りないんだよな」

お腹を狙ったダガーを剣で押さえたフレスさん。その一回り大きい体で上からのし掛かるように剣で押さえ込んでいます。少年のダガーを持つ腕には震えが目立ちます。口は固く結ばれ、減らず口も叩けないようです。

フレスさんが無慈悲に力を込めたのでしょう。少年は後ろへ勢い良く地面に倒れても、力が失われず、地面を転がる。

「フレスさん！乱暴過ぎます！」

その光景に思わず叫んでしまう私。慌ててその少年に駆け寄ります。

「大丈夫ですか！」

少年と共に地面を転がった私のリユートは！少年は私からリユートを盗った罰を受けただけですが、私のリユートは地面に叩き付けられる謂われは無いのです。これで壊れていたら、私は先生に顔向け出来ません。

「アッハッハ、やられちゃったよ！僕の負け」

地面に強か打ち付けられた少年は、仰向けから顔だけを上げ元気そうに笑います。私のリユートを下敷きにしたままです。

「立てますか？」

そう聞いて私は少年に手を差し伸べます。怪我が無いようなら早い所立って私のリュートの安全を確認させて下さい。

「有難う。僕みたいなコソ泥に手を差し伸べてくれるなんて、お姉さんは本当に優しいんだね。僕はお姉さんのリュートを盗ろうとしたのに」

あどけない笑顔を浮かべ私の手を取る少年。

えっ、当然の行為ですよ？心優しき私は暴力男に撥ね飛ばされた少年の身を案じてしまうのです。リュートの身の次にですけどね。

「でもね、僕って悪い奴なんだ。優しいお姉さんにこんな事しちゃうぐらいにね？」

私を掴んだ手とは逆の手が私のお腹に当たる、地面に転がるダガーナイフとは異なる小振りのナイフ。先ほどフレスさん相手に使っていた物と比べると長芋の皮剥きに便利そうな果物ナイフですね、程度の長さの刃しか付いていないものの、私の柔らかいお腹の皮を突き破るには十分事足りそうです。あまりにリュートが心配で、油断し過ぎたようです。

「レミー」

「卑怯だぞ！」

フレスさんとルーさんの声がまた重なってます。本当に仲が良いですね？

「えー、僕は、元々卑怯なコソ泥だよ？自分の身が危なければ何でもしちゃうんだよね」

私の手を握り、私のお腹に刃物を当てながら立ち上がる少年。楽しそうに笑っています。私も冷や汗を足らしながら苦笑いが零れます。私の心臓のテンポは乱れて、酷く乱雑な音を立てています。

「おい、俺に本気で怒ってほしいのか？」

フレスさんの口から漏れるとても低い声。既に怒ってらっしゃいますよね？

「少年、神がそのような行為を許すと思うの？ 彼、…彼女を離さない。人を殺める人間にはいつか罰が下ります」

ルーさんは既に自らの手で罰を下そうと槍先を此方に向けます。その槍に少年より、私の方がビビっているのですが。

「へえー、ラスター教団はどんなに酷い事をやっても神に許されるのに、僕みたいな子供のまだ可愛い悪戯は許してくれないなんて、ラスター神は本当に万人に平等だねえ」

少年から笑顔は消えていました。不機嫌になってルーさんに語る少年。深青の瞳がより深く悲しく輝いています。

その時、気付いたのです。私の首元にあるナイフが本当に細かくビブライトしている事に。救世を歌っているかのように。

「ラスター神は君のこの行為を認めないでしょう」

「はい？ お姉さん何言ってるの？」

私だって何を言ってるのか分かりません。刃を首筋に突き付けられ

た今、私は結構必死で正常では無いのです。

「でも、世の中には色々な神が居ますよ。私の、私の父が信仰する神、フェロスは命を奪う事は、命を育む事と同等に意味があると説いています」

フェロスは私の出身カレルド地方にて未だ人気を誇る動物神の一人。それは5マヌを越える狼。山と狩猟を司る神様。動物神には他にも、農民の信仰するカエル、木こりの信仰する栗鼠、牧民の信仰する豚、商人の信仰する亀など多種多様にいます。これらは一大勢力となつたラスター教に、未開で野蛮なまやかしと馬鹿にされても、人々の中に根強く残っているのです。都会では無く、田舎の大地と生きる人々の中に。

「私もラスター教ではありません。フェロスを盲信している訳ではありません」

それらの神々はラスター神のように、全ての人に恵みは与えてくれません。

「それでも貴方を救う神は何処かに居ますよ」

どんなに孤独でどんなに救われなくても、救ってくれるものはあるものなのです。音楽が常に私の側にいるように。

「…お姉さん、口達者だね？」

我ながら良く口が回ったと思いますよ。

「でも、ラスター教団員より面白いご高説だよ」

そんなに褒められたら私、照れちゃいますよ。それより早くナイフを退けて下さい？

「ねえ、お姉さん。僕を救ってくれる？」

それは真剣に歌われた、一篇の静かな哀歌のように紡がれる言葉。その音の意味は私には分からない。ただ、人の心に哀しみを伝える音。

「ええ、私が貴方を救いましょう」

貴方を誰から、何から救うと言うのでしょうか？私は神ではなく、音楽家なのです？

そんな自らの言葉に戸惑う私を、クツクツと笑い出す少年。先程までの哀しみはもう無い。

「やつぱ、お姉さん面白いや。別に僕はお姉さんに救って貰わなくて大丈夫だよ。お姉さんは素直だねえ、私が貴方を救いましょう、って傑作だよ！」

思いつきり馬鹿を見ました。ああ、穴が合ったら入りたいです。もう、一思いにグサリとやってください。いえ、やつぱり痛いのは嫌です。

「止めーた」

子供のような声と私の首元の解放感。

「僕、飽きちゃった。これ、返すよ。だから、見逃してよ？お姉さ

ん？」

呆然とする私の手に渡されるリユート。本来なら、一発ぐらいひっぱたいてやる所ですが、このリユートが返って来るなら我慢します。相手は未だナイフを携帯していますしね。

「良いわけが無い！お前は犯罪を犯したんだ！我がラスター教団で裁かれなさい」

「大きい方のお姉さん、良いじゃないの。結果的に何も盗ってないんだからさ？」

「良いんじゃないね、レミも別にリユートが返ってくれば良いんだろ？」

ルーさんにヘラツと笑って屁理屈を述べる少年とフレスさんの同意。今、私は少年の処遇より、私のリユートに傷が付いていないか調べる事を優先したいのです。

「そついう問題では無い！」

ルーさんが直ぐに次に続く言葉を言おうと口を開きます。

「太陽の神、ラスターよ、貴方に仕える私にその力を、我が敵を捕らえよ」

突如、何処からか流れたスペル。

空から現れた幾筋の光の縄。私と少年の身体を縛りあげます。いきなり手足の自由を奪われ本日二度目の地面に激突です。

「そつ、ルーの言う通り、そついう問題では無いのですよ」

守護騎士五人を引き連れて現れたシラク司教。あの、私、少年の巻き添えを食らっているのですが？結構、この光の縄、食い込みが痛いんです。

「それでは、レミアさん。そのリユート、渡して頂きましょうか？」

地面に横たわる私に、優しく微笑みかけるシラク司教。

あれ？

(5) (後書き)

久しぶりの更新です。

なんとも文が書けなくなって来てしまっている気が…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7613n/>

音楽家がまかり通る

2011年10月9日19時00分発行